日本産漆を支援する

NPO法人
壱木呂の会

I C H I K I R O

－2018年度クロメ会特集号－

会　報
第17号／2018年10月発行

［目次］

2018年度 壱木呂の会クロメ会

3 「クロメ会に参加して」 正会員 小椰 真弓

7 「クロメ会に参加して」 ビジター参加 店網 華子

8 「クロメ会報告」 正会員 清水 由美

12 アジア漆交流事業 in カンボジア 理事 磯井 美葉

14 麦工房展を拝見して 正会員 石野 たい子

15 うるし 言の葉「ウルシの木の植林」 賛助会員 吉川 由季子

［表紙］

特別指導「縄文人の漆掻き再現」
黒曜石などを使う縄文人の採取法を、国立歴史民俗博物館の准教授・工藤雄一郎氏に指導を頂きながら再現と講演「縄文の漆の話」が行われました。

2018年度 壱木呂の会クロメ会

クロメ会に参加して

正会員　小椰 真弓

2018年9月8日と9日、初めてクロメ会に参加させて頂きました。数日経ち、お会いすることのできた皆様のお顔と、奥久慈の澄んだ空気、漆を練った感触を、あたたかく思い起こしております。当日は水郡線の遅れが生じ、戸惑いながら到着しましたが、初めてお会いする本間理事長をはじめ壱木呂の会の皆さまのお優しい笑顔にホッと安心致しました。

私は2016年に壱木呂の会へ入会させて頂き、茨城県産の漆を使わせて頂いておりましたが、精製の方法を知らず、摺り漆に用いるのみでした。この度初めて、念願のクロメを体験させて頂き、とても有り難く思っております。熟練の先生方にご指導頂き、時には作業を代わって下さっている間に、昼食をとり、ウルシの木を用いた草木染めも体験させて頂きました。当日は曇りの天気で、時々雨や風が吹き付けることもあり、室内でのナヤシの後は、軒下で熱を加えながらクロメを行いました。

５００gの漆は、大きな樽へあけるとたつぷりとした量で、そこへ湿らせた鉄粉を加えて練る感触は身が引き締まる心地でした。力を込める私に「リラックスしてね」とお声を掛けて頂き、フーッと息をはいて力を抜き、漆を練りました。ナヤシを約40分間、クロメを約１００分間行ったところで状態を見て頂き、終了となりました。途中、漆の温度を測って頂くと、32度から高い時には39度になり、その変化にも驚きました。（混入した鉄粉を取り除くには、磁石を入れて数日おく方法を教わり、帰宅後、漆の中からびっしりと鉄粉に覆われたヤマモモの実のような磁石を取り出すことができました。）心地良い疲れと共に頂いた、焙煎したての漆コーヒーの香ばしい味わいは格別でした。漆の花から集めたという蜂蜜は、柑橘のような爽やかな香りで美味しかったです。箸作りのワークショップには時間の関係で参加しませんでしたが、お分け頂いた漆材の鮮やかな黄色に目を見張りました。

　懇親会や講習会では、漆に携わる色々な分野の皆様にお会いし、多くの貴重なお話を伺うことができました。ウルシの木を植えて育てることと採取することの難しさ、それに日々向き合っておられる方々にお会いし、漆を手に仕事ができることの喜びを強く感じました。作り手の私にとって、作家の方々にお会いできたことも、とても勉強になりました。工藤先生と佐々木先生のお話は専門的でありながら素人の私にも理解しやすく、縄文の人々の暮らしから、根源的な大切なものを感じました。縄文時代の漆掻きと、石斧による木の伐採の体験では、その感触を体で感じることができました。

漆の草木染

石斧と黒曜石

縄文時代の漆掻き

　クロメ会に参加させて頂き、普段経験することのできない充実した二日間を過ごさせて頂きました。最後になりましたが、初参加の私をあたたかくお迎え下さり、丁寧にご指導くださった壱木呂の会の皆様と参加者の皆様へ、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

クロメ会に参加して

ビジター参加　店網 華子

すでに肌寒い気候の秋田県から、下道を走ること8時間半。まだまだ夏を感じる自然豊かな奥久慈に到着しました。

私は去年より秋田県の川連漆器の産地で製造技術を学んでおります。もともとは東京の荻窪出身で、移住前に荻房の本間幸夫先生のもとに訪れ、壱木呂の会やクロメ会についてお伺いしており、今回初めてのクロメ会参加が叶いました。

初日は、会員の方々によるナヤシ・クロメ作業の見学、工房見学、ウルシ林と漆掻きの見学、箸の制作体験に参加しました。

漆掻きやナヤシ・クロメ作業の現場は初めて見ましたが、漆掻きでは漆液はほんの少しずつしか取れず、また、手作業によって漆が一日がかりで精製されるのを目の当たりにし、漆を使う際は決して無駄にしてはいけないなと感じました。漆液の出方や質も木によって個体差があり、その研究や実証も多方面から行われていると知り、大変勉強になりました。

二日目は、縄文時代の漆掻きや漆の木の伐採方法を見学し、黒曜石を用いた漆掻きは実際に体験させていただきました。縄文時代の人々は、植物を熟知し、それを無駄なく生活に利用していたのだと実感できました。

講演会では、植物としてのウルシがどこから来ていつから使われていたのか、縄文人がどのように漆を使っていたのか、海外の漆事情についてなどをお聞きしました。工房に戻ったあとはカンボジアから持ってこられた漆を実際に見させていただく機会もありました。不勉強の自分にとっては初めて見るものや知ることばかりでしたが、日本だけでなく、アジア広域で太古より用いられてきた漆はやはりすごいなと感じました。

私は大学時代に中国の雲南省に留学をしており、ベトナム、ラオス、ミャンマーなどにはバスで行き来していたのですが、当時はこの辺りの漆文化について注目しておらず、何も知りませんでした（大学卒業後に化学塗料などを製造する化学メーカーに就職し、それから漆について興味を持ちました）。いつかは私も自分なりに漆に主眼を置いて中国や東南アジアを再訪したいと思いました。

この二日間、漆についてたくさんのことを勉強させていただき、先生方、荻房スタッフ、事務局の方々をはじめとする皆さまには大変お世話になりました。初めての参加でしたが、皆さま気さくにお話してくださり、その多岐にわたるご経験や知識をお聞きし、大変刺激を受けました。

自分は入門者で、漆器業界で生計を立てる道筋はまだ立っていないですが、とにかく周りの方々のお話を聞いて、技術をよく見て、今できること、学べることを大切に、地道にやっていこうと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

縄文時代の漆の木の伐採方法

クロメ会報告

正会員　清水 由美

第18回クロメ会が茨城県常陸大宮市地域で一泊二日で開催されました。

今年は50名近くの参加者がありました。

一日目はクロメ作業に並行して、毎年好評の漆草木染めを、午後からは伝統工芸木工作家五十嵐誠先生の指導のもと漆の木で箸作りを行いました。

休憩時には、漆の実を焙煎した漆のコーヒーが振舞われました。

漆の実を焙煎した漆コーヒー

講師（伝統工芸木工作家 五十嵐誠氏）

長野県で掻き終えた漆大木の木を使用して箸二膳を制作

採れたての漆を制作した漆の箸に塗る作業

漆刷毛製作者 内海志保氏によるヘアードネーションの毛を使った刷毛

二日目は「特別イベント　縄文人の漆掻きの再現 -Ⅲ-」国立歴史民俗博物館工藤雄一郎氏「縄文人の漆・現代人の漆」と株式会社パレオ・ラボ佐々木由香氏「縄文人の新たな植物食・縄文時代の鱗茎利用」の講演を聞いた後、漆畑に移動して、工藤氏にお手本を見せていただき、実際に黒曜石を使い縄文時代の漆掻きを体験しました。一日目に箸作りをした人は、木肌から滲み出る漆を直接刷毛で箸に塗りました。使用した刷毛は漆刷毛製作者内海志保氏に今回特別にヘアードネーションの毛を使って作っていただいたものです。掻き終えた漆の木は石斧で切り倒しました。

午後は佐々木氏の講演にありました縄文人の新たな植物食を実証実験しました。縄文遺跡から土器に付着し炭化した鱗茎が出土しています。

今回は漆畑の近くに生えていたツルボを使い、縄文人が行っていたであろうやり方で何度も茹でこぼしあく抜きをして食しました。縄文人の多様な食生活を知ることができました。

講演（国立歴史民俗博物館 准教授 工藤雄一郎氏）

講演（株式会社パレオ・ラボ 佐々木由香氏）

私達が知る以上に高度な技術を持ち文化的な生活をしていた縄文人。お二人の縄文人への熱い思い、情熱が伝わるイベントでした。

佐々木由香氏による縄文時代の食べ物の検証

土器を使ってツルボのアク抜きを再現

アジア漆交流事業inカンボジア

理事　磯井 美葉

壱木呂の会のポスター（会の活動と日本の漆の採取法、漆掻き道具の作成技術の継承活動などを紹介）

オープニングセレモニー

ソフィテルのメイン会場入り口

全体概要

9月1日から9月9日まで、カンボジアで、アジア漆交流事業２０１８が開催されました。宇都宮大学の松島さくら子先生が中心となって、２００２年のミャンマーをスタートに行われているものです。壱木呂の会のメンバーでは、三好かがりさん、野口洋子さん、高橋香葉さんが作品とともに参加されました。

今回は、世界遺産アンコールワットのあるシェムリアップに、外国からの申込参加者だけで過去最大の１００名以上が集まりました。出身国は、日本、ミャンマー、ベトナムを中心に、タイ、ラオス、台湾、中国、韓国などのアジア諸国のほか、ヨーロッパからも、漆作家や美術館学芸員の方の参加がありました。アメリカ人のシャシャさんによる、漆のコスチュームを用いたパフォーマンスもありました。

地元カンボジアからは、フランス人で漆芸とその復興を目指すエリック・ストッカーさんと工房の職人さんたち、芸術大学漆芸科の先生も参加されたほか、初日の開会セレモニーにはカンボジア文化工芸省の次官とシェムリアップ日本領事も来られました。

ミャンマーのタヨー技法ワークショップ

小椋範彦先生の公開デモンストレーション

プログラム内容

プログラムの主な内容は、漆作品の展示（ソフィテルのロビーとエリックさんの工房）、レクチャーと技法デモンストレーション、ポスターセッション、各種の技法のワークショップ、カンボジアの漆掻き見学などでした。

技法デモでは、小椋範彦先生が全体会議で蒔絵技法を披露されたほか、４日目にもワークショップをされました。また、２日目には、タイの金箔、ミャンマーのタヨー技法とキンマ技法、カンボジアの卵殻装飾が紹介され、一部の人は体験もされました。

ミャンマーのタヨー技法は、私は初めて見ましたが、漆と藁の灰を合わせて粘土ぐらいの固さに練り、立体的な花びらや唐草模様で美しい装飾にします。

ポスターセッションでは、壱木呂の会として、会の活動と日本の漆の採取法、漆掻き道具の作成技術の継承活動などを紹介しました。また、日ごろお世話になっている工藤雄一郎先生、能代修一先生、佐々木由香先生も、縄文漆のポスターを展示されました。

水に浸かりながら漆の大木のもとへ

カンボジアの漆採取法

地面に落ちて芽を出したカンボジア漆の種を手にするエリック・ストッカーさん

カンボジアの漆

カンボジアの漆掻き見学も楽しいイベントでした。バスを3台仕立てて2時間ほど走り、エリックさんがカンボジアの漆液を買っているコンポントム州の村に行きました。

田んぼの中にウルシの木が生えていますが、雨季で田んぼが増水しており、道路から木まで歩いてたどり着くまでに、一同膝まで水につかりました。

採り方も、種も、日本とはかなり様子が違いました。採り方は、V字に入れた切り込みに竹筒を差し込んで、1週間ほどおくと、筒に漆がたまるというものです。途中で雨が降っても、むしろ水がフタの役割をして都合がいいという説明でした。

今後

今回のイベントでは、世界各国の漆好きが集まりました。この取り組みを通じてできた、漆関係者の国際的なネットワークの維持発展に、これからも協力したいと思います。

展示会の様子

変り塗り作品

壱木呂の会の皆様と

麦工房展を拝見して

正会員　石野 たい子

年間を通じ、各地で展覧会を行っている菊池麦彦氏の今年最後の展覧会「麦工房展」は常陸太田市のご実家で行なわれました。彼は常陸太田市で壱木呂の会のウルシ畑の植栽管理にも協力してくださり、大変心強く頼りがいのあるメンバーです。今回会場に伺いましたが、案の定、庭には5本の漆の木がスクスクと育っており（太さから5年くらい）、今年分根した苗も5、6本しっかり根を張っていました。

庭の漆の木を右横に見て、玄関からお邪魔しました。玄関を開けるとそこがすべてギャラリーとなっていました。玄関の掛け花にホトトギスが活けてあり、和室のしっとりとした空間のなか畳の上に座って作品を見ることはなかなか風情があった。個性的で多彩な趣味を活かした作品は若者の感性を活かし、これからの漆器の可能性を感じさせるものがありました。さらにこれは内緒ですが、ここに来ないと買えない変わった作品もあり、あえてその作品名は書かないことにしますので、是非来年は会場に足を運ぶことをお勧めいたします。

うるし 言の葉

【ウルシの木の植林】　賛助会員　吉川 由季子

(1) 分根法と実生法

① 分根法

優良な母樹の性質を受け継いだ苗の生産が可能だが、大量に苗を生産するにはやや不向きな方法。

奥久慈では分根法で苗を作っている。

よい系統の若い樹から採取する。（漆を掻いた木や老木からの分根は発芽率・成長率が低い）採取する分根の大きさは太さ約1㎝、長さ約15㎝（エンピツサイズ）。植える時に根の上下を間違えないように、上は平らに下は斜めに切る。採取した分根は地面にやや斜めに約30㎝間隔で差し、切り口が隠れる程度に土を掛け土と根の間に空洞ができないように軽く抑える。差した分根からは約4週間で新しい芽が出て、秋には植えられる苗木ができる。出荷する苗（山出し苗）からも分根を採取することが容易にできる。

1本の苗木からは多くの分根を取ることはできないが、良質の分根を選ぶことができるので漆の採取量が多く、成長が早く、成長が揃ったウルシ苗を作ることができる。（クローン苗）

② 実生法

種子から育てる方法。

浄法寺などでは実生法で苗を作っている方法で、大量に苗を作れる利点がある。優良な母樹から果実を取り、果皮と種子に分ける。果実には種子の発芽を妨げるロウ成分が含まれているので、十分に脱ロウする必要がある。脱ロウした種子を水の中に入れ、上に浮いた良くない種子を取り除く。残った種子を水を替えながら7～10日水に浸す。吸水した種子を苗畑に播いて発芽させ、植え替えをしながら育て（冬の間は雪に埋もれないように場所を変える）、3年目の春に植栽地に植える。1回に多量の苗が作れる。

(2) ウルシの植栽

① 適する土地

日当たりがよく、水はけのよい肥沃な土地。植栽地へのアクセスがよく、管理しやすいこと。

耕作者や住人に漆カブレ被害がないように、付近に耕作地や住宅地がないこと。酸性の土地は避ける。

② 植え方

1ha当たり800～1200本が適当。直径10㎝の成木で、枝張りは3.5～4mくらいになるので、千鳥植えにして効率よく植える。ウルシの枝同士の干渉を少なくする。

③ 植える時期

3月末から4月中旬までの曇った日がよい。（雨上がりは避ける）苗木から芽が出てこないうちに植える。根の乾燥にも気をつける。

④ 下草刈り

雑草が伸びてウルシに日当たりが悪くなるのを避けるため、最初の2～3年は年に3～4回、それ以降は年に1～2回の下草刈りが必要。ウルシに巻きつかないようにツル植物やササ類も取り除く。

・蜜植や下木（大木の近く）にならないこと…ウルシは里木なので大きくなる競争ができない

・土壌条件が揃っていること

・気象条件…台風・大雨・強風・土砂崩れなど自然災害に弱い

・茨城県は自然災害が少ないのでウルシの栽培に適している

・下草刈りがきちんとできていること。

《事務局からのお知らせ》

① 「公告の方法」についての記載

平成30年10月1日からNPO法が改正になり、「公告の方法」として幾つかの方法から選択し掲示することになりました。壱木呂の会としては今後、継続していくことに無理がない方法として、ウェブサイトに貸借対照表を掲示することになりました。

② ヘアドネーション活動への寄付について

今年9月8～9日のクロメ会で漆刷毛師・内海志保さんからヘアドネーションの髪で作った刷毛の提供を受け、イベント終了後希望者に販売いたしました。

この活動に賛同してヘアドネーション活動の事務局「福祉理美容師ネットワークRibinet」に寄付したいとの理事長の考えに賛同し刷毛の売り上げの半額及び、箸つくりワークショップの「箸削り作業台」の売上げ金の合計￥14,000を寄付しました。

会　報

第17号／2018年10月発行

- 2018年度クロメ会特集号 -

NPO法人　壱木呂の会事務局

〒167-0052 東京都杉並区南荻窪 2-27-3

Tel:03-3334-0628　Fax:03-5930-4147

https://1kiro.jp/　nihonsan@1kiro.jp

https://www.facebook.com/1kiro.jp/

なやし作業　精製作業で行う作業の一つ。生漆を攪拌して、漆の成分を均一に分散し粒子を細かくする。